

帰れない街

高橋 愛美

* 登場人物

藤間 大吾 (30)

野嶋 ゆきえ (35)

野嶋 花音 (6)

藤間 孝一郎 (65)

ゆきえの娘

大吾の父親

繁華街。騒がしい街中。走る男の息遣い。

大吾N「俺は逃げていた。自分から、日常から、人生から、そして今、あいつらから」

走る音、荒息遣い。

大吾「まったく、しつこい奴らだ！どこまで追いかけてくるんだ！」

男A「いたぞ！あそこだ！」

数人の男達が「捕まえろ！」「逃がすな！」と駆寄ってくる音。

大吾「くそつ、見つかったか！」

大吾N「俺は、必死で逃げた。走った」

大吾が、何かに躓いて転ぶ音。

大吾「いてつ、くそつ、これまでか」

男A「よし！いまだ！お前ら捕まえろ！」

大吾N「それは、もう、絶対絶命だと思った瞬間だった」

トラックの走る音。ものすごいクラクションの音。強烈な勢いで止まるトラックの音。トラックのドアが開く。

ゆきえ「早く！早く乗って！」

大吾M「俺は一瞬、何が起きているのかわからなかった。俺の目の前に突然、でかいトラックが止まって、誰か俺に叫んでいた」

ゆきえ「何にしてるの！あんた死にたいの！」

さあ、早く乗りなさい！」

大吾「あ、は、はい！」

大吾M「俺は無我夢中でトラックの助手席に飛び乗っていた」

ゆきえ「しつかりつかまってんのよ！」

大吾「は、はい！」

大きなクラクションを鳴らして、走り出すトラックの音。

男A「げほつ、くそつ、なんなんだあのトラックは！」

男B「つか、あいついないっすよ！」

男A「なんだと！くそつ！」

走るトラックの音。

ラジオが流れている。20時のお知らせが聞こえてくる。

大吾N「俺は、頭が混乱していた。この状況がまだ理解出来ないでいた。何故、このトラックの助手席に座っているのか。何故この人がわざわざ俺を助けたのか」

ラジオから、ユーミンの「やさしさに包まれたら」が聞こえてきた。

大吾N「俺は、どう言い出そうかと迷っていた。助けてくれたお礼をしたかった」

ゆきえ「あたし、この曲好きなのよね」

大吾N「その人は突然、話し始めた」

ゆきえ「娘の花音がさ、宮崎駿の「魔女の宅急便」が好きでね、一緒に見ている間にあたしのほうがはまっちゃって。ほら、その写真がうちの娘。今年、小学校に入学した時なの。親に似ないでかわいいでしょ」

大吾N「俺を助けてくれた、この人は、汗臭い泥まみれの親父ではなく、横顔のきりつとした、とても華奢な女の人だ」

ゆきえ「自己紹介がまだだったわね、あたし野嶋ゆきえ、ほかの連中は、ゆきねえとかゆきばあとかいろいろ呼んでるけど。年齢は、まあ、見た目で判断して」

大吾N「見た目で判断しろと言われても、女性の年齢はわかりづらい。ハンドルを握るその腕は、程よい筋肉が感じられて、その横顔からはとても6歳の子供がいるように見えなかった」

ゆきえ「ねえ、さつきから一言もしゃべらなけれど、聞いてる？」

大吾「あ、あの、お、俺は」

大吾N「俺は、何を言い出しているのかわからなくて、言葉にならない言葉を発していた」

大吾N「隣で、彼女は、プスツと笑い出した

ゆきえ「そうよね、あんまりにもびっくりして、頭が混乱してるわよね。自分がどうして当然、あいつらから、それも見ず知らずのあたしなんか助けられたのかって」

大吾「すみません。ホント、突然で、しばらく頭がまわらなくて、助けてもらったのにお礼も言わずにいて、俺、藤間大吾です。今日は、ホントにありがとうございました。あなたが助けてくれなかったら、俺どうなってたか」

ゆきえ「ホントね、あんな奴らからお金借り

てしまったら、人生いくらあっても足りないいわよ」

大吾「あの、あなたは、あいつらの事、どうして知ってるんですか？おれが、借金してらって」

ゆきえ「さて、どうしてでしょう」

大吾N「彼女はまた、クスツと笑っていた。

俺には、何のことなのか、さっぱり解らなかった」

ゆきえ「ところで、大吾くんだけ？お腹すいてない？」

大吾「あ、は、はい」

ゆきえ「じゃあ、たぶんさ、もう少して、ご飯出来る時間だから、一緒に食べよ」

大吾「あの、ご飯出来る時間って、どこに行くんですか？」

ゆきえ「え？何処って、あたしんちよ」

大吾「あ、あなたの家にですか？」

ゆきえ「なに？なんか問題でもあるの？」

大吾N「俺は、一瞬、想像した。そう、とてもほずかしい想像を」

ゆきえ「あ、なんか、勘違いしてる？なんかいやらしい想像しちゃった？ははつ、大丈夫、襲ったりしないから。うちにはさ、娘の花音と、60過ぎのばあさんが待ってるの。あんたをどうこうするなんてありえないから。それに、どっちにしろ、しばらく自分のアパートには帰れないでしょう。」

あいつら、張り込んでるだろうし、帰る作戦もたてなきゃならないんだから、それに、泊まるあてもないんでしょ」

大吾「は、はい、す、すみません」

ゆきえ「家はさ、ここから1時間くらいだから、ほら、その毛布かけて、すこし寝てなさいよ」

大吾N「毛布は、座席の後ろの棚にあった。俺は、言われるがままに、毛布をかけていた。毛布はとても心地がよくて、俺をあっという間に眠りの世界へ送り込んだ。眠りながらも、何故だろう、どうして、この人は見ず知らずの俺に、こんなにも親切にしてくれるんだろうと考えていた。そして俺は夢を見た。もう、しばらく、忘れかけていた、あの頃の夢を」

大吾の母「大吾、大吾、起きなさい！大学に遅れるわよ！これ！早く起きなさい！」

大吾「母さん、うるさいな、今日は休むよ、昨日、撮影で終わったのが4時で、家についたら5時半、まだ、1時間しか寝てないんだから」

大吾の母「何いってるの！好きでやってるアルバイトでしようが、学業をおろそかにしてやるアルバイトなら、辞めてしまいなさい！」

大吾「あーうるさいなーわかったよ、起きるよ！起きりゃいいんだろ」

大吾N「今から、約、8年前、俺は札幌にある大学に通っていた。将来は医者を目指していた。俺の地元は、函館。母親は一ヶ月に2・3回、米だの野菜だのいっぱい、風呂敷に包んで、俺のアパートを襲撃していた。今日も今朝から、カレーだの、煮物だのつくっていらしい。札幌に出てきて、2年。俺は、とあるタレント事務所からスカウトされて、ここ、札幌で活動していた深夜のテレビ番組や、ラジオにも出演したり、少しずつではあるが、名前が売れつつあった」

大吾の母「あんたね、ちよつとテレビに出て周りの人からちよつとやされて、浮かれ気分でのるのだろうけど、タレントなんて浮き沈みの激しい世界だろ。あんたみたいななんて、はいて捨てるほどいる世界だろうに。ましてや、今、あんたは、医者を目指して学校に通っているんだよ！」

大吾「わかってるよ！わかってるけど、俺の人生は俺で決めるから。母さんが納得いかなくても、俺は俺の決めた道を進むから」

大吾の母「大吾、あんたね」

大吾「いってきます」

玄関のドアが閉まる音。

大吾N「大学2年の後半ごろから、急激に学校に行く回数が減っていた。と、いうか、

もう単位があぶなくて、留年確実なところまできていた。俺の家族、親戚や従兄弟のほとんどが、医者や看護師だ。もちろん、おれの親父、お袋も医者だ。小さい頃から将来の夢は勝手に医者にされていた。でもその頃は、なりたくないものや、やりたいことが見つからず、その親の決めたレールに乗ってるのが楽だった。そんな人生でもいいと思っていた。ところが、ある日を堺に俺の人生が変わった」

トラックが、ゆっくり止まる音。

ゆきえ「ほら、ついたよ。起きなさい」

大吾「う、う、ううん、かあさん？」

ゆきえ「失礼ね、かあさんで、こんなでかい息子生んだ覚えないけど」

大吾「あ、あれ？」

ゆきえ「お母さんの夢見てたの？まだ、おこちゃまですこと」

大吾「お、おこちゃまって」

ゆきえ「ごめん、ごめん、さあ、家に着いたから、入って」

大吾「あ、はい」

トラックのドアを開けて、降りる音。

大吾N「車から降りて、なんとなく空を見上げてみた。空には、目が痛くなるほどの星が輝いていた」

ゆきえ「きれいだよ、札幌も昔は星が結構見れたけど、いまじゃ、朝まで街の灯りが消えないもんね、ここは、すごいでしょ、この星を見てるとね、自分はなんて小さいんだろうって、自分の悩み事なんて、ものすごくちっぽけに感じて、この下にいるだけでなんかもすごい元気もらえちゃうんだよね」

大吾N「どのくら、眺めていたのか。いつの間にか、ゆきえさんはいなくなっていた」

玄関（引き戸）の開く音。

花音「もう、お腹すいて待ちくたびれたわ。早く家に入んなさいよ！」

大吾N「突然、誰かにズボンを引っ張られた声は聞こえるが、姿が見えない。そう、ここは満点の星が見える変わりに、辺りにはほとんど街灯がなく、真っ暗だった」

花音「ほら、なに、ぼーっと突っ立ってんのさ。こっちは1時間もご飯、お預け状態なんだから」

大吾N「目をこらしてよく見ると、傍には小さい女の子が立っていた」

笑い声。ゆきえ、花音、大吾。

大吾「すみません、俺、あそこに30分も立っていたなんて」

ゆきえ「よっぽど、あの星が気に入ったんだね」

花音「見るのはいいけど、ご飯食べてからにしてよね」

大吾「ほんと、花音ちゃん、ごめん」

大吾N「時間は、すでに10時半を過ぎていた。不思議な感じがした。そう、それは、小学1年生の子供がこんな時間に夕ご飯を食べているからだろうか。本当ならばもう寝ている時間だろう」

花音「この、卵焼きはおばあちゃん、このウインナーはあたしが焼いたの。それから、このお味噌汁のお豆腐もあたしが切ったんだよ」

ゆきえ「すごいね、1年生になってぐんとお姉さんになったのね」

花音「あたしの愛情がいつぱいつまってるんだから、感謝して食べるのよ！」

大吾「はい、感謝していただきます」

大吾N「久しぶりだった。ご飯にお味噌汁。

こうして、誰かと落ち着いて食事をするのも」

花音「ごちそうさまでした」

花音「こらっ、大吾もちゃんと言わなきゃだめでしょ」

大吾「は、はい。ごちそうさまでした」

茶碗を片付ける音。茶碗を洗う音。

ゆきえ「花音、後片付けしたら、歯を磨いて

寝るのよ」

花音「はーい」

花音のバタバタと走る音。

ゆきえ「小学1年生の子供をこんな時間まで起こしておくなんて、なんてバカな母親だろうって思ってるでしょう」

大吾「あ、えーと」

ゆきえ「今日は特別なの。1週間に1回、あたしが帰ってくる日だけ、こうして一緒にご飯食べるために、あの子、がんばって起きてるの」

大吾「週に1回しか、家に帰ってないんですか」

ゆきえ「この商売はさ、ほとんどが長距離の仕事ばかりでね、一つの仕事がだいたい、1週間くらいかかる時もあるってね」

大吾「あの、ところで、どうして、見ず知らずの俺なんか、助けてくれたんですか？」

大吾N「俺は、話を唐突に切り出した」

ゆきえ「ちよっと、外、出よっか」

大吾N「外は相変わらず、満点の星空だった

辺りの静けさが、より一層、夜の闇を演出していた」

ゆきえ「大吾君は、なんであいつらからお金を

借りることになったの」

大吾「俺、今年で30になるんです。昔は医者を目指して、大学に通っていた時代もありました。8年くらい前には、札幌でタレントみたいな仕事もしてたんです。その頃は周りがちやほやしてくれて、俺も有頂天

意なっていて、東京で仕事をしようって上京して、ところが、所属した事務所が倒産

して、決まりかけていた仕事も全部おじゃんになって、大学は退学してしまっていた

し、親からは勘当されて、今、思えば、いくらだってやり直せたのに、あの時は、全てが絶望的に感じて、それからの人生は悲惨なものでした。東京にもいられなくなっ

ていざ、札幌に戻ってきたけど、実家には帰れなかった。戻ってきたけど、ろくに仕事

もせずに昔の仲間の所を転々として、あげくに友人にだまされて、お金を借りに行つたところが、あいつらのとこで」

ゆきえ「見てたよ。札幌の情報番組でリポーターしたりしてたの」

大吾「え？」

ゆきえ「偶然だったの。1週間ぶりに仕事か

大吾「え？」

ゆきえ「偶然だったの。1週間ぶりに仕事か

ら戻ってきて、花音にお土産買うのに札幌によったの。いつもは通らない道で、偶然あいつらに追いかけられる大吾くんを見かけたの」

大吾「え、俺のこと、はじめから知ってたんですか」

ゆきえ「あたしもね、生まれが函館なの。父親が函館駅の朝市で店出したの、あたしもよく手伝ってた。父親が心臓悪くてさ、無理しないでって何回も言われていたんだけど、ある日の早朝に発作起こして倒れて、でも、救急車呼んでも全然、受け入れてくれる病院がなくて、もうだめだって時だった。ずっと立ち往生している救急車に気づいてくれて、一人の少年が声をかけてくれたの」

大吾「あ、」

ゆきえ「そう、君が「どうしたんですか？もしかして、受け入れ先の病院がみつからないんですか」って駆け寄ってくれたの。覚えてる？」

大吾N「俺は、目をつぶり記憶をたどった。

まだ、函館にいた頃、自転車で通っていた高校時代。医者や、親父の後を指して受験勉強の毎日だった。かすかに思い出せるのはそんな記憶だけで、ゆきえさんの言う記憶は俺の頭には残っていなかった」

ゆきえ「覚えてなくても無理はないわよね。

もう10数年以上前の事だし、助けてくれた君には、きっと日常の出来事にすぎなかったのよね。声をかけてくれた君は、すぐに自分のお父さんに連絡をしてくれて、そのお父さんが受け入れ先の病院を見つけてくれて、あと5分、到着が遅かったら、命はなかっただろうっていわれた。親父はそうやって助かったの。父はそれから死ぬまで、あなたのお父さんの所に通い続けた。数年して、君が、テレビに出てるって聞いたときは、家中が大騒ぎだった。あなたはてっきりお父さんの後を継いで、お医者さんになるものだと思っていただけ、そういう人生もありだなんて、自分が好きな道を行くのがいいんだなって、ものすごく応援していた」

大吾「……思い出しました。もしかして、月に一度、父の診察を受けるために、わざわざ数時間かけて通っていた、いつも、たしか女の人が送り迎えしていた」

ゆきえ「そう、それがあたし。父が亡くなったからは通院することもなくなつて、助けられたら先生とも疎遠になつて、そして君の事ももうどこかに消え去っていた」

大吾N「思い出したくない記憶が脳裏に浮かんできた。東京で失敗して戻ってきた俺は本当にすさんでいた。ふるさとの函館はすぐそこなのに、俺は絶対に戻らない決意をしていた。いや、戻らないんじゃない、戻

れなかった」

ゆきえ「偶然って本当にあるのね。それもこんな偶然が。今から、ちょうど1ヶ月くらい前にね、君のお父さんに逢ったの」

大吾「えっ、親父にですか？」

ゆきえ「最初は私、わからなくて、声をかけてくれなかったら気づかなかつた。お互い、時間がなかったからあまりゆっくりはお話出来なかつたんだけど、何かのご病気ですね、体重が15キロも落ちたって、顔がものすごくやせこけていて、あの当時の面影が全くと言って感じられなかつた。でも、よくあたしなんかの事、覚えていてくれたって話したら、僕を信じて何時間もかけて通ってくれた国松さんの娘さんだ、忘れるわけがないよって」

大吾N「大学を中退して、東京に行く。親父は大反対だった。医者という人生をやめたことではなく、途中で投げ出してしまうことに猛烈に怒りをあらわにしていた。中途半端が嫌いな親父だった。俺が進みたいやりたい事なら、やってもいいと言ってくれたが、一度、やろうと決めたことは最後まで遣り通せ。それが、出来ないようでは好きなことなんかまともに来るはずがない。他の道を歩みたくなつたらそれは仕方ない、お前はまだ人生のスタートラインも一歩手前だ。いくらだって修正はきく。が、今、

抱えていることを投げ出して次に進んだところで、何も始まらないぞ。それが、親父の言葉だった」

ゆきえ「あたしね、思わず、息子さんは元気ですかって聞いちやたの。後をついで、立派なお医者さんになってるんですかって」

大吾「俺、大学を中退して、上京して、あつという間にどん底の生活になって、やつとの思いで、北海道に戻ってきて、でも函館には帰れなくて、自分が情けなくて、悔しくて、ふるさどが、家族が、親父やお袋がこんなにこいししいのに逢えなくて」

ゆきえ「親子の絆ってすごいよね。お父さんね写真持ってた。手帳の間に大事に挟んでいた頃の写真。あたしに、見せながら、どこで何してるんだか、手紙ひとつよさないけど、元気でいてくれればそれでいいって」

大吾「そ、そうですか」

ゆきえ「ああやって、君のお父さんに再会していなかったら、いまこうして、大吾君と一緒にいるなんてあり得なかったのかな。本当に奇跡にちかい偶然よね。大吾君のことを追いかけていた連中、あいつらね、昔あたしの人生をめちゃくちゃにした連中なの。花音の父親って、死んだバカ亭主なんだけど、だまされて連帯保証人になって、あいつらからお金借りて、借金があつとい

う間に数百万円に膨れ上がった」

大吾「そうだったんですか」

ゆきえ「とにかくいろいろな人に相談して、違法な取り立ての借金だから、最後には弁護士さんが間に入ってくれて、正当な支払額にするように交渉している矢先、あいつが死んじゃってさ、本当にどう生きていこうかわからなかった。でもね、あたしには花音がいた。あいつのお袋さんがいた。あたしにはそれで十分だった。で、今はバカ亭主の後をついでこの仕事してるの」

大吾N「俺にはないもない。何も……」

ゆきえ「せっかく、あなたのお父さんが引き合わせてくれた運命よ。こんな事くらいで負けてちゃ、あたしが助けた意味がないじゃない。逢いにいきなさいよ、今の情けない自分を見せにいきなさいよ！君は決して一人じゃないでしょ！あたしはどんなに逢いたくたって、もう二度と逢えないのよ。どんなにひどい喧嘩をしても、どんなにひどい言葉をあびせようと、一生、じつと本当に君だけを心配してくれるのは、親だけよ。あたしは、自分に子供が出来てはじめてその気持ちが変わった。お父さん、あなたが生きていくだけでいいって、元気でいてくれるだけでいいって、写真見て泣いてた、きつと、逢いたくて、逢いたくてしかたないのよ」

大吾「俺、どうしようもない、親不孝もんだから、きつと、帰っても受け入れてもらえないって、ふるさとは捨てたんだからって自分に言い聞かせて、もう、落ちるところまで落ちてやるって、ずっとそう生きてきた。親父はもう俺のことなんて……」

大吾N「俺は、涙でそれ以上言葉が出てこなかった。気がつくと、あたりは少し明るくなっていた」

ゆきえ「あーもう少しで日の出だね。さあて今日は忙しくなるわよ」

大吾「もう、仕事ですか？」

ゆきえ「そう、最後の総仕上げ」

トラックの走る音。クラクション。

花音「あたしも一緒に行きたい！」

ゆきえ「なに言ってるんの、花音は学校があるでしょう」

花音「大吾！また遊ぼうね」

大吾「おう！」

大吾N「俺は、またトラックに乗っていた。でも、昨日とは違う、穏やかな気持ちで」

ラジオが流れている。ユーミンのやさしさに包まれたら流れている。

大吾「ゆきえさんは、どうしてこの曲が好きなんですか？」

ゆきえ「みんな、小さい頃はいろんな夢をみて、将来自分がなりたいものを想像して、きつとなれるんだって信じてるでしょ。でも大人になって現実を知って、信じる力が弱まっちゃうのかな。信じるってとつても大事だと思うの。子供の頃に不思議とかなくていた夢は、きつと信じる力が強かったから、大人は余計な心配ばかりして、信じることを忘れてる、それを思い出させてくれるの」

大吾「信じるかあ」

ゆきえ「まずは、自分を信じる、大吾なら絶対大丈夫」

大吾N「トラックはゆっくりと走っていた。心地いい振動と、昨日の夜更かしのおかげで俺は、10分としないうちに、眠りについていた」

ゆきえM「函館に送っていくわ」

大吾「そ、そんな。これ以上迷惑かけられないっす」

ゆきえ「なによ、ここまで迷惑かけたんだから、最後までかけなさいよ」

大吾「ぐっ、」

ゆきえ「こらっ、大の大人が泣くな！それに先生ともゆっくり話したいし」

大吾「は、はい」

トラックが急停車する音。

大吾「ど、どうしたんですか」

ゆきえ「やっぱり、花音もつれていこうかな先生に、あたしの娘だつて合わせたい！」
大吾「今からですか？もう、学校、はじまつちやうんじやないですか」
ゆきえ「急がなくちゃ！」

大吾N「トラックは少し速度を速めて、もと来た道を戻り始めた」

トラックの走る音、ラジオの音。

大吾N「俺は、自分を信じることからはじめようと思った。そして、おれをずっと信じていてくれた、親父にお袋に伝えたかった。ずいぶん、回り道したけど、俺、やつと見つけられるかもしれない」

ラジオの音。

大吾N「人生はまだ始まったばかりだ」

Σ